三山雅集序

夫佛種従縁起とハ吾宗ニ沙汰する事にして其由来を述るぞ
神乃清盃はいかぬ成むまてハ何事ならむ事を顕し
頌德ハ是善因乃よりて来る事を志し先頌つるなりや
于茲三山事ハ實権現の霊威にして萬歳已往の舊跡ハ
宮祠寺院の規模書ハ秘し傳ハ記せるもの若干なれど
此外にも土地方畿に在を行るも遐境乃息むなきの稀
ふしておもふに世にあらわれば鬚髯而蔵也まての深き山下
の験者巣雲屈呂茹あまねく國原をめぐり武陵乃雅士
なりしを慕ひ龕前奉納の句々を顕ひて満らしく古き今ふに
集めんかれ梵河の貴きに流れ登りて山谿のおもかげを

ゆかりくりし画書ありつめでたし今乃詩歌耳目ゐ來
我出つしね予この州房にそそきて是より席たてしんやと
はかりい縁このむ所事し記しけるもたる巻を関するに
寔に往昔より秘し給ふ處中は千と百が一つ微か中乃微
なれとも大抵等閑に得ぬ事ともにして志ある艾繁撮要は
乃ゆ理解れの袖まして又んや信心すむを思ふてのゆへなれいふの
事をも志るべきなたり童蒙の目にも於て易きここそ心を
いひ侍れハ翁この曰或ハ年代の怪なきる所ありて由来未考
なるもいふ人もちかれいいでや神威乃貴我志かこの山に志
我伏まする者豈敢て年數ありかならず信ぜずんば我信せば將信
ぜさるなを信ぜざるべけんや一歩ひし歩む運ぶものの山嶽の靈氣

權現は靈光視聽にぬかで不誰この信ふ偽なきがるはやはりぞく
歷代乃形ちすまあつらわ人情の辟固なりてその事をいふに
蓋君子は恥る所なり故曰愛而知其惡惡而知其善など
あれらは幼學やりうれを初めて瓦礫は一句夜光となし
入事にて堪能乃るる所自ら片腹いたく侍れども又道
あるべきは一與なりあり我いはすよき所は褒誹とも心をさく
て善に入の端なりとはみ乃そしれるるハ後の識者に讓り
子この見聞けることつ四つはなる我往詣者は小補にも擇す鏤
ように云ふく三山雅集と題をそこの名らはを志るすし
おそれながらて僅かにもよれなる我耳にし、ぬれ漸にあるを
運ぶ乃命なるし偈ふ、して讃佛乘乃善因としもなれる

りしかバ僮僕を出して残星乃鼎ろり荒澤の流
を汲ミ後夜お炉ろり酒田乃康茶於沸して一碗二碗
すゝめバ惟二人両腋ろり清風の生する事のをぼへぬ

荒澤　野衲東水書

三山雅集巻上

寂上河　附白糸滝

此國にながるゝ大河にして源は會津根より漲り出てごてんを經ぬれば云いにしへは難所なり絶て山形の城外をめぐり板敷の山關を抱きて象流とゝけ入てむかしは兵いくさのありし果は酒田の海濱に落る也稲をつみたる船をのぼりくだりなれば稲舟といふ也なんといふはいなふねのあるをこの月ばかりといへるありとぞ古き文にも書傳へけり

古今集大歌所御哥

寂上川のぼればくだる稲舟のいなにはあらず此月ばかり

後撰戀四　三條右大臣

もがみ川ふかきにもあらで稲舟の心かるくもかへる浪かな

千載雜下長歌　俊頼朝臣

最上川瀬々の岩かど湧かへり　下略

續後撰秋下　自賛毀他 十戒中　寂念法師

もがみ河人をくだせば稲舟のかへりて沈むものとしりけり

續古今冬　前内大臣

いな舟も暫しとゞめよ冬ぞ最上川沖の河瀬なりけり

夫木集　雅經

もがみ川はやせもおかじいそ舟のかよひたえずぞ岸の

基卿

新後撰雜中　藤原嗣房

いな舟ののぼりかねたる最上川しばしといはん人を待む

續千載夏　前関白太政大臣

最上川みかさまさりて湧かへり瀬こしもしらぬ五月雨の頃

續後拾遺雜中　俊宗

かは瀬々にせかるゝ稲舟乃しばしぞとまる思ひはかりは

新千載戀二　鴨祐夏

もがみ川しられぬ物にかよふ舟のかへさの浪に

同上　藤原相如

いなしくもかへるもかなし最上川沖のいなみんつれど

新拾遺戀二　有家

最上川人の心のいな舟もしばしばかりはさてものまれ

新後拾遺恋　後鳥羽院下野

最上川いなとしあらん稲舟のしはしとてやはとしもへにける

同上　道因法師

もかみ河とりやしらぬ稲舟のわたるをこそ程ぞ久しき

（人皇百十二代霊元院天皇ノ御宇）

貞享の比かし羽黒山別当執行会覚の院の
おりしも河をまなびて　僧正龍海

いなふねのかのうたを見て最上川は安きこ世のなかもしかも
稲舟ハ浅き水に流されしのかるるものかはかるる

麦刈て稲ゆずりよろしからん　川　貞徳

奥羽行脚のころ

さみだれをあつめて早し最上川　芭蕉

川流れ手を纔(サデ)さして都にも見ゆるかな　其角

稗(ワラ)もしぐれに世の中よりも寂くし川　京　惟然(ユイネン)

かくてこそ胡坐(アグラ)乃顔の櫂(カイ)流れけり　浮生

星落て底より茂かりぬこの渡　出雲　風水

降よ夏の川の野よりかなたの岸　亡人　呂丸

寂るきや鮎かりはかる道者舟　酒田　覚兮

代垢(アカ)離や幣(ヘイ)に新の何もし川　今　桂奇(ケイ)

水の粉に簑(サイ)乃芽(キ)ひや寂よ河　今　茂伴

涼しさの舟のりになりもかかれかい　鶴岡　旦松

稲舟も馬積みて瀬落の流れ　羽黒　此紅

蟻(ケゝ)貝の名を結ふて氷(ミ)屑(スリクヅ)の形　今　東水

鵜(う)ぶねひろふ烏(ヤラス)なりけりを寂し川　今　山風

初鮭や稲荷の落る鰔(ニカゴ)　かゞ弟　今　呂笳

寂し川ハとられど右の断岸千丈ばかり目に緑樹のしげみより向く瀧りて見ゆるハ白糸乃瀧なり此河の上下まさきひ瀬たゞの瀧なく四十八瀬とや備はりけれへ源義経蝦夷ゟ落られしころ此みちのくへ趣きける時あれ此瀧を見んと供はりし奥しけりける女房のよみける歌あり

寂し川瀬々の白浪ふきよせて空ゆく白糸の滝

白糸の瀬やまつるりところてん　七人　桃隣

数(チ)門さそ千(ノ)鳥る柳(ヤナギ)の糸やたぐる滝(タキ)　柳風

清河　附五所王子

一丁ニ繪アリ

庄内領地此関谷(カンコク)ありハあへ乃按察使(アゼチ)とけ下りて関門をたへらきけるかや今も城主より刑司(ショシ)を置れて往来を改る也　瀧(ケイ)中より吹きる風ハ春秋ともわかぬさまげし

これハ詞(コトバ)にて清河ぶしとうたふハ是なり

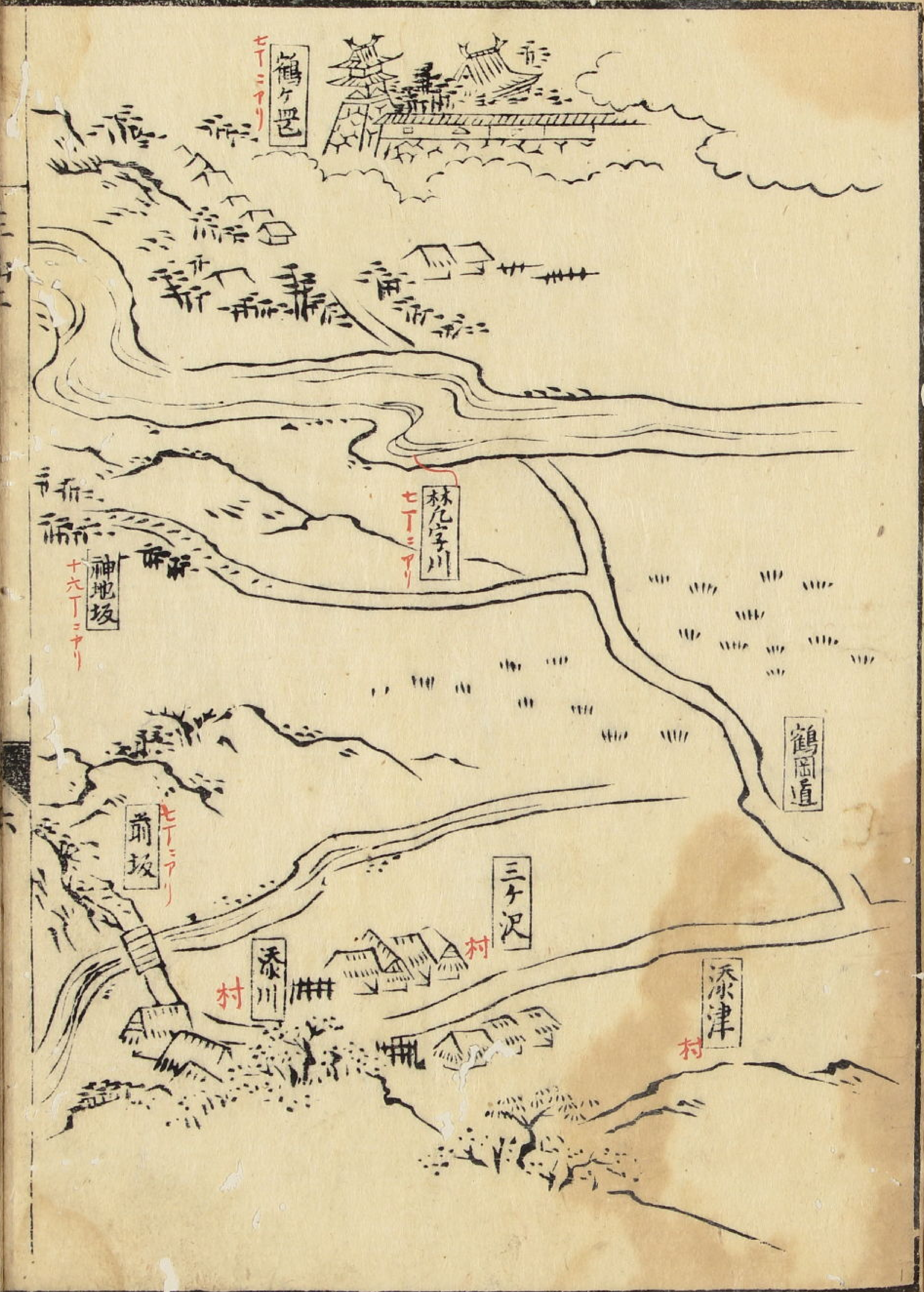
こまの門や裸(ハダカ)ねぶり乃道の手　山形　桃陽

郭(ホト)公(キス)夜(イソ)浦(ヒキ)翔(ヨ)へと通ばさりし　羽黒　東水

村のかうり小さき宮地あり是ぞすなはち五所王子なり

それハ義経下向の折から箙太刀鎧等を奉納ありて今ハ宝門より累(ルイ)代の什(ジウ)物(モツ)とそ

鶏(ケイ)啼(キャウ)けり数(ジフ)猿伯さえ右の花　呂笳



八千余坊

是より狩川といふ里より清河よりの驛路にして
むかしは高川といへるよし三ヶ沢添津なといふ村成るを
添川村より出る水を添川ともいふ又加我寺と号して羽
黒八千余坊の中なりけるやとかん上旬館といふ館の
跡あり上旬の事末にて記す

十八丁中旬館参照スベシ
廿七丁下旬館参照

佛名坂 六丁ニ繪アリ

是より右の方にみゆる道へ行ば薬師堂あり今
いま向といふ所をつまりて移るそのうち三世の佛名
と唱へたてしけるまやそのねゆかり

衣裏の月扇に移るやかける坂　羽黒 独歩
さきをうしろにのけ移る妹背しや　今 梨水

三十二丁ノ念佛堂参照

五輪森　六丁ニ絵アリ

此門を坂れはくたり佛名信實の塔婆あまた建て在

る所なりやすべて此あたり秘密山澤猶捷ありせんみえたり

渥美迴廻なども大聖間弥逐一にあらはさず

風鈴の声ふりおろすや穂屋のいろ　此紅

汗流れね空もむけりや鴫のこゑ　呂茄

前坂　六丁ニ絵アリ

あれ坂をくだりて向れ町へ入んれば村ぶる続きて

幽なる人家なり

なりゆきなや木の間を見り旅　宗因

住程を建てり有明　等支配　江戸 凍雲

菰かぶれ貪り煩ふ数やりの羽　江戸　仙化

上件所々従寂上趣于羽黒山路筋也

元和八年戌八月酒井忠勝庄内へ補任入国アリ

鶴ヶ岡

六丁ニ絵アリ　寉ヶ岡ト云フ名称ノ起原ハ

是よりハ又越後路ゟ羽黒へ趣くの道筋やの所
酒井左衛門尉城下也古ハ領主ふして城中郭外武
家やしき並ふ工商の家〻懐恵まちくしづく
繽紛歌の嘔唖たる市人の言語ゆかく熟して盈耳
む城下乃内七日町といへる市旅人の驛舎なりその
おかく入判をあるまへ山への達ともの〻羽黒へ
おもむくへし

梵字河

六丁ニ絵アリ

鳥居川原八ヶ岡ノ町中ニアリ

城下とぬける所まへ川あり往昔湯殿月山の靈
より弥陀大日観音乃種字此の川より流出下にたに
れと今もその名を流布して往古のよりい
川迄と鳥居川原といふも羽黒一乃華表
よりかるなり

結けす此雲を濡し梵字川　助叟

あさかけや柳や檜原おもふ字かち　一蜂

燕の郷しそれなりを保武字河　江戸　倫々

藻乃花うり魚尾を靈霧し梵字川　今　倫芦

青柳やもはちるその糸かりよる　山形　窓柳

蛙まで阿呼おさめれかんし川　米沢　九々

清しさや是れ遊魚や夜於保むし河　會津 苔水

[illegible]

觀きにいれ不まふ立て[illegible]縄り　東水

水れわゝる雫(シツク)れ結びし梵字ヶ滝　李山

きぬくへバ三角楯(カド)し　已(トモ)　卯(ウ)菊(ナ)　呂茄

梵川

川をわたりて向ふ梵川といふ村あり（梵字川ノ東ニアリ）昔梵川の城主とく何がしの[illegible]信仰し尤能除太子（人皇三十二代崇峻天皇ノ第三王子ナリ）より帰依せられし西南乃方より母狩(ハヽカリ)山金峯(ボウ)（金峯山ノ西南ニアリ）山へ入ゆる赤川村（梵字川ノ東ニアリ）松尾村（梵字川ノ東ニアリ）祠ニ貴布禰など羽黒より由緒あるゝ不なり小れ方ゟ酒田袖浦乃眺望(テウバウ)よくなびき海山

（北丁ノ的村ニ見合スベシ）

とかんよりは

鄽(ミセ)かし馬ハ啼ねども　蔵(ニヲ)は[illegible]　浮生

喰物しありや松尾れ　狗園雫　惟然

流(ナガ)し滴(ケメ)るれ魚ハりを菊乃露れ　呂茄

酒田 并 袖浦

（宮野浦村ノコト）

酒田みなと亀ヶ崎といふ（城郭アリ）代々城主の領内にして此所にも一城あり西國方運送(ウンソウ)此所に成る湊にして萬戸庶く旦暮(タンボ)乃煙むなしく則ち海濱(ヒン)は袖乃浦あり

拾遺巻五　よみ人しらず

[illegible]袖の浦ハ[illegible]

金葉雑上　　　　平康貞女

なかなかに盛乃しほひにおもひしに袖の浦まで行波かな

新古今雑上　　　　中務

袖の浦の波ふきかへす秋風に雲の上まで涼しからなん

新勅撰恋四　　　　前関白

しらせばや思ひみだるゝ袖の浦にひとり立しも波やかゝると

同上　　　　侍従

わすれぬる人はむかしのみかへりて波のこる袖の浦波

続後撰恋二　　　　藤原通憲

君おもふる涙の海と底ぬれどみるめかゝらぬ袖のうらかな

続古今恋一　　　　参議雅経

ひとかたに人わたり心をおもふかな浪かけてしをつぬ袖の浦風

続拾遺恋五　　　　常盤井入道

あけのこる袖乃しほひに波よするいかにうらみはおりやりけり

新後撰恋一　　　　祝部成茂

袖の浦せん清への江乃かぜのしらせずばやかてかなしき人

同恋四　　　　高階宗成

忘れなさいおもひしに帰る涙ぞひとしぼる袖の浦浪

続千載　　　　祝部成賢

あら海をしほかせして見る人乃ねぎしをかけて袖せん浦なると

同恋一　　　　三条入道内大臣

流しよりかけし思ひしみるかなかたにつかへし袖の浪

同恋一

あま衣ぬれそふ袖のうらみてもしる人もなき恋にあはれて

前参議雅有

同上

しらせばやしのぶはうらで朝夕に波こす袖のうらみありとも

為道朝臣

同上

くちはてぬ袖の浦浪かけてだに人をしのぶは我をなれぞ

従二位親子

同恋四

年月のおもひはしるしかさねてもしぼる袖のうら浪

亀山院御製

新千載秋

藻塩くむ袖のうら風さえぬればかさねてし霜や衣うつらん

藤原宗泰

同恋二

しらせばやうら初わかしみる袂よりおつるぞかゝる袖の浦なみ

権大納言公忠

新拾遺旅

舩とめし行舟袖の浦風ふきまよふ夜半の波の枕にぞきく

法印源意

同恋二

憂きは涙見ゆるかは余所にも我ぞ塩干もしらぬ袖のうら浪

為兼

新後拾遺春上

春きぬと霞の衣かさねても浦はるかなる袖のうら浪

御製

同恋二

こゝろなき塩たれてふる雲なれば袖のうらみもなにとこそえん

よみ人しらず

同上

暁の別にいはましかは衣ぬれてぞ知る袖のうらなみ

正三位知家

新続古今恋一　洞院摂政左大臣

逢ひみても猶干しかねつ後の音はいかにしをるゝ袖の浦風

同恋二　源家長

思ふにハ身をかへてもとめておもひそめにし袖の浦浪

同四　按察使資明

立帰りあふ夜を思ひほさでやよ別れし涙の袖のうら浪

同五　平忠房

重ね行いつまで涙ほしかねつ月の中ぞにぬるゝ袖の浦波

同上　進子内親王

逢人もなき玉藻かりほさで袖の浦に寄る涙の波のよるく

同上　一条前太政大臣

しらず我のみなかりける我のみ涙のなれてなみ

同雑上　権大納言経豊

あま人もおもひもしらで雲の上に袖のぬれぬる袖の浦浪

名所百首の中より恋　法印季吟

忘貝ひろひもかねつ立帰りぬれける袖の浦波

日数経しとしのみさ涙かれぬたゆみし袖の浦波

さすらへて遊行上人けふ来りけり　袖の浦人

かくしても藻塩の枕あはでぬれにけり袖のうら人

遠境

あつみ山や吹浦かけて夕すゞみ　芭蕉

暑き日を海に入れたり最上川　仝

海上より堂を拝して風かほる　泊洲

出しほれは月を雲の峯に似よ　惟然

紹巴まで袖しいそがじ海の月　呂丸

けふられや蓑より取く袖の露　尾花沢 清風

鳥海山（飽海郡ノ小部ニアリ）

あの山鎮坐の神一記にて大物主神社と爲りその外山内の事ハ寶蔵記未覧所覧にゆくしさし玉の康平（七十代後冷泉院天皇）年中宰屋川次郎安倍貞任同宗任が逆の時大海浜三郎は此山にしとまりて籠りて謀をめぐらし御海の山乃かたより富士の高根をもて九重の残雪斑駁たりしかれ此山の中にて二のおほふかより見れば象嶽也それ故の識之

時しらぬ山も葛の根こしらへ餅　浮生

雪の鴫の雛も花なりける海の海　風水

鳥の海なしみおち岩秋の雲　酒田 不玉

も海やさうぢの雨のあかり際　鶴岡 重行

塩屋や男も往しゆかしみ山かな　東水

雷は沢も炮合やよき乃宮笑　羽黒 武仙

琉璃光の宮も小なくなし雪の山　呂茄

神功皇后ノ御陵

象潟(キサカタ)　由利郡塩越村ニアリ

鳥海山は少しはなれども象潟なり能因法師が幽居の跡(イウキヨノアト)西行上人乃老木の桜九十九の嶋八十八ヶ潟これら島めぐりて詞に写さバ筆も誰その此景は釣(ツリ)さんすべし此図乃名所からなれバ序(ツイデ)を得て蹤をたづね記(シル)すのみ神功皇后の陵(ミサヽギ)もしあり寺は干満(カンマン)珠寺といふなりそれ縁因ゆかし

後拾遺　旅

世の中はかくても経けり象潟の海士の苫屋を我宿にして　能因法師

新古今　旅

さすらふる我身にしあれハ蚶潟(キサカタ)や海士の苫屋にあまた旅ねぬ　顕仲朝臣

象潟の桜は浪に埋もれて花の上こぐ海士の釣舟　西行法師

行つもし此の行脚よ　遊行上人

ゆかしくハ思ひをとめよ象潟の海の苫屋に松風ぞふく

江上の縦横一里ばかりにして俤ハ松嶋にかよひて又異(コト)なり松嶋ハ笑(ワラ)ふがごとく蚶潟(キサカタ)ハ恨むがごとし寂しさに悲(カナ)しみをくはへて地勢魂をなやますに似たり浪乃打入る所を汐(シホ)こしといふよ

きさ潟(カタ)乃月や流人のまくらもとけふ　釈澤菴

きさかたの雨や西施(セイシ)が合歓(ネム)のはな　芭蕉

汐(シホ)越や鶴脛(ハギ)ぬれて海すゞし　令

旅寝せし月見ん螺（バイ）小松ぞり　一晶

西行桜は遠き関小笠捨より　三千風

鶴は孫そらん所咲き歌乃海　山夕

浪越ぬ契りありてや雎鳩（ミサゴ）の巣　曾良

廉潔（シハロ）とく関屋を離ればちぢり　凍雲

水やそゝぐ鶚（ミトリ）乃生鮨（スシ）すらしあげ　呂丸

蚶潟や鴨は縮わくらそとかゝ　則堂

三所のうや稲はまうまの尻をおとそ　七人　舟川　呉柳

蚶潟（キサカタ）や首かし出る虎がれ鼓屋　清風

静（ヒツ）けさよ所ゝと茂嘗（ナメ）て汐乃あし　東水

三所潟や霞（カスミ）小かり未えぞまし ぬ　呂茄

八乙女浦 附 熱海（アツミ）

八乙女ノ奇穴ハ田川郡由良村ノ西海ノ海岸

是はこ蚶潟（キサカタ）乃續きさやりそのおふ羽黒権現此ふより瑞光を輝（カヤ）のし山頂（チャウ）より梯のより則海中に小石あたりしを鳥居あり今小玉川ゝそゝ月より文月のはしくく星河さいやかれる我々この沖より龍灯あらわれ出て中天より昇りて又海山より落るゝその光濤（リャウ）を切て不思議といふや又そのそのそいや相よら修験入峯乃時をとる羽黒山より遥拝（ヨウハイ）の霊地なり

八雲より川娘はおもくさ美しと　清風

笠峯より汐路（シホヂ）や照く八咫（ヤタ）れ月　東水

是より南すこ隣るまで知れず熱（アツ）海といへる一邑（ケフ）あり小海小

近しといへとも土民の草刈かよふ所より湯の出る所より温泉
湧出て諸病を治する事奇なり奥羽両国の老若遊賞
の佳境なり

蓼酢にてまつ海原を見渡すの哉　伏見 任口

海原より藤浪の浪たちかへく佐やりける　江戸 鶴里

右酒田鳥海八乙女浦等ハ記ス途中ノ遠望ヲ也

荒河

是は往還の路筋なり川を渡りて小さき森あり金
澤宮といふ青奥州秀衡病死のゝち家嫡泰衡従ニ
頼朝命ニ殺ス義經於衣河ノ館ニ頼朝入攻泰衡ヲ正不臣之
罪ヲ時郎ノ従照井金沢なといふ武士の古城あり

しるしとて此所に生を書し一社を祀られしと也
人の傳へ也

まて乙女や男を殺しけるがし　東潮

稼ぎつゝそれくら栗や来れる手に掻　羽黒 久武

是より茶門なといふ村あり野荒町といふ村へ出て川右の
方に玉川村といふあり寺あり玉川寺といふ古へは羽黒の
領地にして玉泉寺といへるよし天台山の流れを汲みて古は
かく号しけるを今は禅家の法窟となりて古き
宝物なとも今に伝へり

神路坂　六丁ニアリ

松の並木立たる通りを遠く手向の町に入るこれより神

此山へ現じ給ひしにより此下より入て寄せ給ふにぞ
かく名づけ侍るとかや傳へはべりと

山伏の鼻の高さや尾花あれ　東潮

入門や左右に見えて雲行く々　羽黒 天立

一歩進高神地坡　瞻望絶頂若盈科　今

松風長入路人袂　洒掃凡情思不他　南枝

松涼し出家も來ぬる千とせやる　今

山の序尾見やあやどる松の花　今 白藤

●中ノ坂

坂の左の方に立石あり辨慶の礫石と申傳ふさし心
得ぬ事なりけれど弁慶登山の折から婦しいかなる事にや

おしはかりぬべし

●赤坂（六丁ニアリ）

薬師堂あり昔ハ佛名坂と名付けるよし（六丁ニアリ）

赤坂やむかしの花の山ざくら　庄内 定頼

衣うつてと配り多し十二神　今 李山

●念佛堂（六丁ニアリ）

称名山蓮臺寺と号し武陵の人あるさいの為に發心
修行して此所に念佛の一字を造建し今に至り僧
信心帰依の者ありて六時不退の道場となり此の境内
あたりの墳墓ある中より藤原氏元應二年二月九日と
あり（人皇九十六代）後醍醐帝の年号なり墓もしるる石塔いかなる人をうめしか

三十余坊　六百坊

あやかし

茶臼にハ泣まいものし柿尾ぶれ　山形 幽窓

滑河(ナメリ)

念仏堂より下れる町並也　此あたり八日町といふ此町中にて流るゝをなめり川と云金剛水の末なり

明(アキ)岸(ミチ)や合掌たしえ手むけ山　羽黒 薫堂

鐵(シツ)ゆるゝ篝山ぶしやかりせん宿　尾花沢 莞兮

渦(ナベ)蓋(フタ)の底(モト)りみやげやかさりつき　直水

金剛水　六丁ニアリ

金剛樹院の地内なりけ寺ハ今三十余坊の内にして麓原なりありむかしハ來迎山千勝寺といふ六百坊の頭にして異験の僧侶住持なり今に來迎が池としてあり此池となりされバ此清水を貴ミ給ふ修学の砌金剛堅固のかゝりはこゝにもかしこにも冷水を湛(タヽヘ)られ炎(エン)熱(ネツ)のわざらひ人の願ふなかにも此水を用ひれて験(シルシ)を得る事今ハ時々なり

八千余坊　三長吏

中旬館

むかし羽黒八千余坊ありしころ時年中の行事繁多にして寺務三人を定めて一箇月のうち上旬中旬下旬をわかちて是を三旬とよび三長吏とさだめ此内にハ中旬なる人住なれぞ中旬館といふよし記さ深川村に上旬の鉄館之可知　五丁ニアリ

社家
七千軒余
長吏職

當山往古ハ衆徒中山伏陽く居住し修験社家等
七千軒余ありしが故ありて徒黨蜂起不絶鎌倉執権へ
おのゝ訴へ悪事停止ありて國民ゆるされたりとぞ
されば最明寺時頼回國の砌この山本堂社家等をはじめ
三ヶ年逗留ありし古記あり後鎌倉御府のゝち
當山の探題とて梅津中将殿を被下置中将殿男子二人
ありし當山長吏職を被補一ヶ月に十日替りにて仕來るを
家役依之て上中下旬と以て上旬家老大田氏中旬家
老三澤氏神林氏下旬家老真田氏吉住氏小関氏
なりし下旬家系近代まであり其後常善坊と
云し人是なり

的場小路
町乃内小右の小路あり毎年九月九日鶴岡城主より年
行人等を以て流鏑馬の神事あり上に記して的村（八丁ニアリ）
是をやぶさめ乃的場此処を村なり松尾より神領
の内村々より諸入料を取出して故実なり

池中
是は昔むかしより醫王山機乗寺と号して五百坊の領
しかるに今ハ修験在家等新に成てより石の橋あり
當山前住持天宥法印彫刻の巻ケ文あり

雷電石（此石神佛霊像図彙二巻十丁ニアリ）
いにしへ雷電此處に落ちて其常なりしをかへるところなりけるまま

此の石今時雨降れば人家の背戸にありて不浄に觸る
時ハ必ず其人たちまち病を得るとかや。此の石にて雷電清
水といふありむかしの閼伽(アカノ)水なりけるが今はなかり

石坂

是は西の方へ往来の人馬のかよふ坂にて十町ばかりなる道
右の方にある是より下は居山中禅寺といふ。音に二百
坊乃境地なりけるとかや。是より山上なる古来より雞(ニワトリ)
あらはれ出けるとなんいひける故に此(コヽ)を称す

引攝(インセフ)堂

引攝ハ弥陀如来慈覚大師の作なり。是より堂社
数く多くして一々に其名を挙(アゲ)がたし。佐久間ハ大日なりとぞ云

奇特なる事あれども繁ければここにもらしぬ

黄金(コガネ)堂

（十九丁ニアリ）

應化堂といふ三十三躯(ク)の観音いとも貴く並びおはし
ましぬ。則羽黒権現三十三の應化身を崇(ウヤ)まひける（本地佛ハ聖観世音菩薩トセリ）
かくれなき草創いはれのはなし。中興(ナカコロ)武将頼朝卿（文治又ハ建久年中ノ頃）
羽黒山修造奉行として土肥次郎実平を下されける
よしそれ影像今にて堂にあり像の裏に漆書(ソエ)にて
土肥次郎實平とありて稲岡村といふ所にて其年塚をて
今にありて家のなりしも生を終れりけるとや
文禄年中甘糟(アマカス)備後守(ビンゴノカミ)景次此の堂を再興ありき（豊臣太閤秀吉ノ治世 百七代後陽成院天皇御宇）
むかしハ堂のあまた悉く輪蔵なんどもありしが堂の後には天神

松あり周圍二抱ありて二俣となりて枝葉しげり
ありさまえならぬ五十年あまりさきにその木枯れて
今は根ばかりなくなりぬるなり

花さきぬれ霞ぞ深き磬の音　天立
流星としいふも浅き谷の金環　李山
むら時雨ふりつる金衣鳥　呂茄

観音堂

十一面観音なり此の主にて下総国香取郡福田村
伊能氏何某といふ者に年法三の清山法信
にまかせし法関東疫癘の妖孽ありけるに此者の
家にも一月二日の夜より牛二疋あらはれ主人患ひ
思ひわづらひしを見て力なく哀れに思ひけるに或夜
夢の中に来る牛ありて我はこの寺の
観世音なり疫氣を取れぬる事ならば我に思ひ
よりし此後一家の内を見守り疫神の難は
おそるべからずと示し給ふと見て覚めぬるやいなや
三の山の霊威を貴びて尊さあまりあるに喜
異の感を催して唱仰の心浅からず此観音
を奉納し丹誠追日厚し神威是より尊く
追年此事かけ此堂の建立なれば記せり
あらたかなり伊能氏さいはひに身病ありしも孝子
亡霊の追福として供田を附したりき

[illegible]摩訶[illegible]此寺も
いかで見る古月より

荷ふ柊し三門乃東まの堂れ巻　東水

蝦夷古館

むかね堂のうしろの方に鍍の跡あり往昔蝦夷人此所に籠り住けるとなん此寺の不動尊はこの石の上に来降し給へるよし申伝ふ

館や守れ鶉となりて啼けりき　東水

釜清水 十九ニアリ

むかし大家会席の砌用ひける大釜とゝ中法雨で二門の釜ありけり一つは此池中に沈て猶うるびあらはるゝ今一つは古りて堂に見るあり釜堂是なり

日より障子の萍乃うごきけり　鶴里

蔭ゆくや燈し絶えし浪れ底　久武

正善院 十九丁アリ

黄金堂の別当なり是も三十余院のそれにて此ちよう御堂を以て所人住居せしが猶彼院藏を辞し林下の幽閑に遁世の宗風にも深く偶かくりて呂丸英士と風義を慕ひて句く俳秀よりし小五とせあまりさし身辺にかくる吟友乃交まじはれて存命は一両句成寛り古所得る

水音の洩れぬ所にまもりけり　[illegible]

やろく寝醒るや居れ陶る夢　即堂

杜若かな

病蛍
晝は蛍小ばしらしゆかし　桃先

辞世
水な月や今ぞそよぐる湯殿の雲

下居宮　十九丁ニアリ　附　南谷

二王門より奥にあり南谷にして小さき丘にあり社記曰毎歳九月晦日三山権現下山す十月朔日神集を出雲州大社に同晦日帰座至十一月九日下居す此宮にこゝの敷祭今に至り年々中冬九日湯殿あり一年吉凶の神託あり則天下国家山上山下の吉禍を託宣し給ふ昔は山の執行職十月一七月星霜に
かゝりける神託事畢て山上せり思ふに諸社の
神旅なりと云ふべし

かりなきや清き汗や匂ふかな　羽黒　幸信
涼しさは神もおかげや涼しさを　此紅
樹なりし桐やおりなむすゞしさの　李山
白木綿も康静なり付添く　呂茄

大黒堂　十九丁ニアリ

人皇五十一代平城帝の御宇大同二年に静修法師配流せられ此国に来り住せり伝教大師御作の大黒天を安置し給ふ其時の堂の傍に大黒松とて大なる一樹あり是小さき所の根果より

咒小肥くあぶり孫彦ぞやしわこや　李山

●桃清水（十九丁ニアリ）

大僧正行尊は此山へ分入し時近里悪病流行しを行尊師の桃實を加持し此水ニて吞しむるに悉く病ゝ愈けるよりかくは名づけゝるとなり

桃清の流らんは世に涼し　羽黒　安心

●行尊塚（十九丁ニアリ）

是より南の方なり安養山といふ山にあり抑此僧正の事は三井圓満院にて碩学にして白河院（人皇七十二代）崇敬御他ことに異なる事ども多く霊驗高徳挙て數へがたし傳記の繁なるが中よりまぢかく略記する事如左

系圖

三条院（人皇六十七代）—小一條院（六十八代）—源基平—行尊（従三位号御子宰相）

又白河院之猶子となり十二歳にして薙髪し三井の明行に随ひ十七歳にして峯入難行を勤む夫より驗者の名高く永久四年補園城長吏（七十四代鳥羽院天皇御宇）保安四年任延暦寺ノ座主（同御宇）長承二年勅為家僧之上座居于三井平等院（七十五代崇徳院天皇御宇）にて終り給ふ其の終り給ふ所諸佛に示しさるさへ依國抖擻の行者此山に来りし錫を掛給ひし當山此終り給ひなむといはれしを此辺に身を隠したまへりといひきたれ一門の古墳今もあり寛永（百八代後水尾院天皇御宇）の頃法流の麓に住ける衆徒

持經院心了あり長ありてくし塚の中より一石の金
札ありて行尊師大峯修行の時よミ給ひけるとぞ
もろともに哀とおもへ山桜の歌の金札より志るし有
とおくくさめかわくのあらく成して三度まて社をたちまし
姥塚の倉稲荷大明神を祠(ニツリ)をたれハ是成はしめ宇賓ち
あるゝに跡(モガ)止ありて六百年已往今に成る感涙袖を
ぬらすものなり

龍(リウ)膽も書の隠りいざ問はむ　惟然
旅寝(ツヤ)の夢ハしおりく桜の実(ミ)　風水
偕老も茂りにや雲の峯　羽黒 峯月
杉笠の雪や拝殿のゆりとし　今 千露

仮に出きり霞開らく金鳳花　今 了枝
花咲出て吟しおもふ桜かれ　今 東洞
法の塚うち拾せよや花ぞこの雨　羽黒 栴也
實方し尋ねて桜ちるやとぞ　藤嶋 立宇
或は雲の橋(ハシ)し天兜(マト)巾(キン)　呂笳

峯ノ薬師

十九丁ニアリ

此堂ハ當山入峯修行の時修驗行列遶(ジョウ)堂(メグル)の後
をうら拝せくかたりしとぞ

野に山に茂生て流れ世界かな　岩城領主 風虎
うけ出の薮ある雨さしの座せ虱(シラミ)　浮生

荒澤

往古ノ學頭屋敷 卅四丁ニ宝藤院トアリ

鹿嶋石

能除太子羽黒山及七月山ニ至ル

此町むかしは學頭屋しきなりしそれ外福昌寺傳心寺ほかへうつされしなりけるとし今此町の内康嶋石といふ石あり町内の鎮守として（三十三丁参照）
毎年當山禅定乃砌ハ旅人手向（タワケ）鍛（アラフみ）とく一寸四方しおもむ
搗餅は道者にて商ふ事おびたゞしき新なふうし山家の形
容（イヨウ）りは似合ず旅客名物と賞翫せしなり

執行清水

海（コウ）町と云所にありそれは流れ早澤と云往来の傍也

鳥崎

羽黒記ニ云能除太子至ニ羽峰ニ時樹陰深鬱（ウツ）ニシテ而殆（ホトン）ト迷ニ岐（キ）路（ロ）ニ
時有翅（テツハサ）八尺靈鳥二足來（キタリ）テ導キ能除蹊（ツイタル）羽黒及月山等ニ乃至ル

太子歡（クワン）然（ゼン）トシテ而歌曰
彌（ミ）也（ヤ）喜（ギ）茂（モ）禮（レ）遠（ヲ）能（ノ）我（ハ）播（ガ）倶（グ）曽（ロ）能（ノ）也（ヤ）磨（マ）加（ガ）羅（ラ）須（ス）輌（カ）珥（レ）良（ラ）
廼（ノ）志（シ）呂（ロ）久（ク）那（ナ）良（ラ）牟（ム）謩（ヨ）蒲（ニ）天（デ）毋（モ）
蓋（ケダシ）此山萬々歳を經ん嘉（カ）瑞（ズイ）を如此詠給ひて此禽類（ルイ）に示（シメ）され
たるにや烏（カラス）は頭に白く向ひしわが山は守護の
よの稚（カ）塚（エイ）をのこしたるしてそのかゝたし今にありて
山上山下に變（カワリ）あらん時ハ三足の烏みな白にかへるとその
知る事悉くあらてあなれ

曙（アカツキ）や雲もりて月も　舊寿立　江戸 神叔
是非ともねさつる闇夜のかくれ　呂茄
うれしや今はまよふ守らん　崎（サキ）　栅也

桜小路

是より三成瀧水寺光明院と云昔ハ三百坊を領し寺院ありしや此山続れ入口より天拝(ハイ)坂と云所ありこれハ能除太子天童を拝(ハイ)し給ふ所なりとて名付けりとそ申伝ふ

上裏町

古墓(コバカ)町とも云是より荒沢乃方へゆく野(ノ)径(ミチ)あり

下旬館 五十ノ下旬館参照

是れ下にて光明院主住居ありし院主屋鋪とも云今ハ別当円里坊屋鋪と称せり上下旬の事に小書(カミ)ある

稲荷山

古より稲荷大明神を移し崇む山内の名山あり付
此神若何る事時〻やいかしへまこの鳥高嶽なるを
りるしなんこれ澤追思澤といふ

水の尾乃結ぶにくゝ森にかゝるなかされる　呂茄

二王門 廿八丁ニアリ

此の二王尊ハさらに法湛(レン)道とかいへる禅家乃徒権現へ丹誠乃志願ありて尓るころや一院を辞し此下にあたり居をしめまこの佛像を建立せんと發願しその二王堂を造営なり右の脇に小舎ありさらに法関東より牛をを奉納して家をはなれても牛ハ湯殿権現の仕着ホして帯かり繪の紀てに納めんとありしや

石ニ児童ノ足ノ跡アリ

継子坂　廿八丁ニアリ

むかしかの女有しか中の子を失ひてはかなく物せし
此所より程なく小き児童の這歩する石あり是に
足跡ありこれよりかくいふ名付し青物の中に有ける
縁より此寺に小子安地蔵なども安置せる事となりぬ
識は身に傳はれ物語りきゝみどり子もやしぬる方なく
悲しくれども兄哥を西行の学ける物に引て判
じたるおもくいつちる物も思いたみ杖を殘しけん
後世更恐胥ッ

下坂や手にまれて西く目待乃花　介我

物の母より筒や嶮しき岩傳ひ　羽黒　其翠

それ母乃渡りに流れや鬼あざみ　鶴岡　李夕

をぶるんより石に落つる秋の蟬　山風

あふるゝまで花ぞしくしの傳子坂　呂九

便ものさよ襟に稗ある草　李山

むかしをしのぶ子にしあらぬ門木の花　呂笳

白山官

坂氏なれば石の中に一乃宮勧請して今なれども
今は官殿魔壊して修験入峯の拝所なり

祓川　廿八丁ニアリ

昔へ今ぶれは中の称ありて此門と云ふ柳此門は言源
湯殿月山乃両嶺より流出る清水にて往昔

よりなれは近をさめしを年々諸人身上の達寔
又ハ國家の禍災をはらひ荒和祓終年のちとせ
名賢ハ高縄しその門よ下りてみをはなしまるよ探
まふひ川とハ名付しより此不よりゆよく権現瑞籬の
内なれは往昔の人々身心を清めん登嶺まてさかそ
右の方より瀧あり倶利伽羅不動の鋳像水中に立
かふ激り落る飛泉ハ朱夏玄冬わかし白布を流すし
あまりて銀河の九天より落るを賦せしもさもしく
みるよりたる塵を洗よ

祓去凡塵浄有川　委波日影一縄金
金縄界道瑠璃地　瀑布垂幡千力尋　釈　實傳

次韻

人世塵垢茲祓川　心身潚洒浄如金
岩前仰視一條瀑　彷彿飛龍下百尋　釈　海秀

千首和歌にも名有りし
おれ山よりなかるゝて　酒田　政盛
まふひ川絶ぬ流を不もも有乃いで羽の山やうつしてらん

水さらゝやぬるまて流るゝとしわすれ　素堂
栗巌ぐ不動の怒る深山しかれ　京　言水
嘘はきえて涼しうれしやまふひ川　里風
欲垢のちちるゝ人やいちも川　桃隣
草刈乃野麻毋のへん祓河　風水
背にまつとく新涼蛙ぎは川捨れし　東夬

身より千丈あまりて瀧ぞ落　沙水
羽黒
維瀑衣ねぢり目せざる門居しる　親福
まろひ門白玉涼しうら垢離　令　旭堂
鮎落て石より飛るの新もなし　令　梅露
月もろ粉ゑて砕くなり瀧は門　孤鷗
問もさうり霧乃布不夜よるね　幸信
珊らん星合の瀧しあちら瀧門　南枝
清くぞみえしは岩なり夜乃瀧　其翠
瀧壺や无何有て落る荷葉形　李山
彦星乃身繕ひあるまちらひ門　呉柳
後門や道者も雑喉し瀧く地　幽窓

飛瀑の墨や粉ぐの移く根芹とハ　呂茄

不動堂

瀧の中段より左に御尊容乃前立なり古人より名高し滑侶時々此所より落るよしか傳へて

念佛堂　六丁ニアリ

和光山月桂院といふ是そこの湛道此所に道れ給ひて不退乃念佛をはじめおこなひけり代々も禮ずる身両くならるといふ十八の悲願より乗じ今は西方の宝刹とかかれかんと貴くぞおぼえ侍る

道すから色露し花一きりの卵　沾徳
松乃中ゟ頭巾の底の市中なり　江戸　雁山

律院ゟ登り来し海棠哉　東水

八大堂

八大龍王を祠し一宇なりしを近く堂廡の模様魚鱗
氷波のかたちを彫付たりされは堂のうしろに桐生の
ところ幾年来を経よりしこれさ所務ありけ堂より
してかれ来りより析く竜形の渡る事あるとや傳ふ
そハ此山の権現と龍形の神秘滿しまさる古人の
一説ありしハ藤なりハ八大龍王の鎮護しかも軍實の
詠しますやいかにも申されて年ごとの事也所傳

五重塔

廿八丁ニアリ

本尊ハ正観音菩薩脇士ハ軍荼利妙見の二尊也

六十一代朱雀院天皇御宇

天慶年中平将門建立之よし傳ふ朝敵叛逆の心
をいだかれ法施をせられけるハいかゞ思ひ侍りて武蔵
國神田社ハ社家の説なり大己貴命を崇めしと云へど
林道春この神社ハ将門の霊を鎮めたりしが
まさに此塔の發起し悋する事跡因縁のありし追て
可考

人皇百代後小松院天皇御宇

應永五年前駿河守藤原朝臣氏家再興之同六年
癸丑六月入佛供養時導師天台沙門観学院尊藏
しる記録ありと云へと其後も塔の四方に法報應化の
四字額あり小野道風の手跡なりと申傳へたり

高顕幾層雲幾層　層天無翼一飛攀　釈 實傳

賸蒼仰見斗牛際　四萬由旬倦望眸

次韻

孤巍宝塔王稜層　遮断大清隣月樓　禅光

一逕慇懃三拝立　堂中聖顔共青眸　令

今一重霞しおくはしまんうれ　羽黒　東月

白雲を九輪のせたり山さくら　旅人　三扇

學頭屋鋪

(廿六丁荒町参照)

塔乃ほとりにあり羽黒代々の学頭職は爰に住せり上小(五重塔ノ件ニアリ)ゝよる龍師は呉駿高徳の僧にして男鹿嶋神社は兼帯せり六月十五日羽黒山乃祭祀事畢りて又男鹿嶋の祭祀あり今にて凡その道程三十有里を隔たり同日は内にて役あり飛行せりといへりそのほか天下大旱年崗庶民祈雨於侍竜池邊誦法華請雨等経三日之内法水霑地輪云々このほか奉く祭へつりし道智尊量等の続傳は前にて住居して今は荒町宝勝院にて住せり

天神社

(廿八丁ニアリ)

天満宮は崇めん數鴻の内は承わりて漆より向ひ此峯小天神社といふなりこのほか大日堂観音堂普賢堂等境内にあり並び奉り

護摩堂普賢堂

一ノ坂

(廿八丁ニアリ)

右あるは凡二十余段の石の内なり事は略して

普賢堂の前より八幡坂のふもとへ石階六百七十間余
前代別当天宥法印寄附ス此坂の右の方秘密山并
といふ谷あり

火石 廿八丁ニアリ

一此坂の左にあり此の石より西南方に谷間に南野し
いよいよ石清水のごとく氷石あり是より出羽の二つの石
ともに古往今来詩を賦し歌を詠ぜし称せし石の
事は陰陽二気の寄寓にして火石は陽報の顕し
森羅草木の萌芽を助けて発を今に至り闇冥の
夜も光明赫々と燿る蝙蝠も人知る事時々や滄海
の舟人ははるかに目路を見る事もありなれ氷石は

又雨露の潤沢は凝りて石中より冷々たる霊泉
を涌出してその流れをとして数万の民草を潤せしむる
旱暑にも絶えずして奇妙の秘なりとや伝へたり此の氷
石の流れより来て玉河と云ふ所二気乃異石深山幽谷
を陽する事是又その名石にして此の桐生の松の人往古
より境地を陽する事わずかにしてもあらずわが山の
蔵る陰徳陽報の本の御むらの石の霊行末殊に国
家の為に山上山下の人法ともに退転なからん事を示
し給ふ往詣の老若等聞きの香を成すものなり
いまや山あり居たる上にかかん信ぜられん仰ぎみれ
鶴ヶ岡の英士榊原氏氷軒なる石を云霊一寒氏

總てはより送る説々しくハ社記古録等ニ詳らかなり
甚深也奥秘や書不農史に傳通するところにして
おのづから心ぼそさや物言はぬ石の痩(ヤセイ)し瘦(タエ)人中の聖りハ

蝉やりもや是れ常なり石ぼらに　嵐雪

石れ出の新や落ち所岩清水じ　亡人 喜運

雪水ぞ湯殿ぼらの根や物言はぬ石　江戸 倫水

編書あり郊(カウ)社(ジヤ)れ跡(シセキ)やものいはぬ石　羽黒 孤鶴

有(ウ)漏(ロ)無(ム)漏(ロ)れ稲(イネ)葉原(ハラ)山や岩(イワ)清水　令 不及

わけ入らば小山の庭(ニハ)なり物言はぬ石　李山

出る水れ中ぞ不凉し　義武(アナニエヤ) 此紅

石いに濡らす鶺(ヤサヘキ)鴒く清水かな　梨水

雪照るや五老山高の崎の石　呂笳

二ノ坂　三十六丁ニアリ

是坂の上段油石ぼりしよりいふなる程也かゝる所なり

長競杉　廿六丁ニアリ

二もとならびたる杉の葉ふさ人様さへ等しくおなじこれより渓間

又桐生の杉あつくこれ杉枯れば又谷の杉を付けとかや

そふもぞいふ教る所以小松など樹の下より見さけの際ぞそ

あはれべき事也いさ石なども積て是を供ふる乃至童子戯

聚砂為仏塔可思可感

古塚の涼しさやせん　石仏　江戸　銀葉

ぬれ笠や獨杖ふれて蝉の声　山風

四十丁ニ西行庵・南谷アリ

四十一丁ニ三ノ坂アリ

四十二丁ニ花蔵院アリ

四十三丁ニ御坐石アリ

地藏堂

別當へ着する道者あの下にて經木等を建つ

山王宮

此宮中ごろ廢壞したりけるを東叡峯の願王院主台宗擁護の神なれば再營して庶民として朱の玉垣ふたゝび輝きしかも台家傳燈の守となりしゆへ給ふ

伊弉諾山

三十六丁ニアリ

若一王寺と号して伊弉諾伊弉冊の二神を崇として湯の
まつる所なりいざなぎの森とて大なる巖あり往来の人これに
より西の方にある彌生乃はなる山巻ならぬ濃

香芬郁より

梅が月枕もがなれ岸なりとも　東水

むつかしい伊弉諾の岩の座ならば　羽黒 覧水

若王寺

三十六丁ニアリ

此寺ハむかし下山貫主玉腹と称する法國殺在の末流を換
斷して寺山の號とハ伊弉諾山若王寺宝前に湯殿を号し
當時東武輪王寺の宮の御支配にして繁榮追日月門
前に蓮池あり其中に弁天宮あり其外に霊佛秘寶等
由の若き手じんの高き故年を積みてたやすく耗しかしけるを
のちハ山をゆるがる天宥法印此所に移りそれ
天宥師乃事は五十世の別當にしてその智の高く

輪王寺ハ下野国日光山ニアリ天台宗ナリ

天宥法印ハ

まつり一山の標準なれハ附りとしてこゝに芭蕉翁行脚のまへ
手録せし文左のごとく

芭蕉菴桃青拜

（天宥法印 行法）

羽黒山別當執行不分叟天宥法印ハ行法いみじく
こゝろふかく止觀圓覺の法智才用人に施して
あまねく山を穿ち石を割りて巨靈の力女媧がたくみ
をつくして坊舎を築き階を作れる青雲の滴を
うけて筧の水とをく流して盤石の器を工み四山
の奇特をしめさるゝ事多し一山挙てその徳を慕ひ
その徳はおのづから高くして再び羽山開基と
尊しといへどもいかなる天災のなせる事にかありけむ伊
豆の國八重の汐風に身をさそはれてむなしく浪の露
との跡をたづねけん昔語るゝも山の麓下官ニ
山院礼の席追悼一句まゐらせよとて門徒等すゝめ
に勧めらるゝ断りがたくて戯言一句をつらね
て香の縁とし手向侍る憐をも事になん侍る

其玉や羽黒にかへす法の月

年ハ元禄二年の頃になん翁行脚の折からの圖司呂丸（人皇百十三代東山院御宇）
と寄りてかつ別當代會覺阿闍梨に謁して南谷別院
に舎して憐愍の情こまやかにあるじせらる

有難や雪をかをらす風の音　芭蕉

住程人のむすぶ草庵　呂丸

此時の一巻ハ其角につかはし撰じて後に會せん師に美

濃國谷汲ハ花山法皇の笈をおさめて其
笈のかけ松より後ハ寺ハ都の方と御尊の一牒を詳
なり寺寳ハ有躰にて

此寺侍識の法
良恵の縁より　僧正徹海

いかめしく今宵の月ハ竹林の辰思ひいで羽の奥の山寺

寺こもり秋聴しらるゝ松の口打しき　湖春

嬉しさの法の声深き傍の音　浮生

きそうりや竹中にて岸の花ざかり　釈白鉄

文覺遊

文覺上人王寺より此谷あひの何とかや高雄
の上人当山に登りて林の中にしばし数日経て権現乃
実威冥王の加護を蒙りたる庵記をかざりて御前に宝を献る

游宴や蝉乃あちこれの何ゝ洛外　此紅

日中も探りて照らしぬ陰かれ　立宇

西行庚

西行法師登山の事古記にも見えたり象潟の西行
嶮しき路の探りしありその折しも此寺にあまたの中や
御寺のいかなる法の縁しく山中にありてかく見え
かの山中にあまたの西行桜といへる一本の花なる
かれも見し此寺の名のなりけるぞいらじ

山路深くたちや菊のこんの寺　嵐雪

東風けなりかて蘭の匂ふ津ありけり　氷花

南谷

この坂へかゝる右の方より三町はかり行て寺あり紫苑寺と号す則ち山伏行者の寺なり上古は三長吏五ヶ院主職学頭職其一職なりといへる院なり紫苑寺なりけるよし今は此職寺のさかゆへ山の寺の下にて紫苑寺谷といへるあり渟水といふ所をそれとも伝ふ其五十鈴川の蛙はとの下へ流れたりといへる所あり古の小流にうけるものの捨られしといへる様子やしはらく所をりしてもの延宝年中の事にて冬の内（人皇百十二代霊元院天皇御宇）は蛙の鳴けるよし聞人奇なりとて其後伊勢の蛙は鳴けるよし此流は浄人の住たるとぞ

反魂梅発薫南谷　南谷活春萬国新　實傳
楓葉秋来好花好　風光又愛好於春

次韻

南谷地霊人又傑　宛然常愛物光新　海秀
櫻桃開尽楓林錦　冨貴風流秋與春

冥加ありせ行く古塚の梅かな　呂丸
水清くつきは隠れてくれたち谷　桃隣
おそや桜も干茸のけむし　東水
雪はおそく鹿の梅ありてなかけり　此紅
蕨やしまい根によりて茶の匂ひ　李山

こゝみな鶯や本尊ばかり南にて　梨水

こもり月や氷かくれど鐸の音　不及

宵ゐる堂へ杓もちて行く朴のかな　呂茄

榛や猿もおそれぬ小松の行　山風

此坊康も鉾とゝやとぞや花ざかり　真翠

舞台に立たれんとすり鶏頭花　庭水

二ノ坂　三十六丁ニアリ

坂の上には八幡宮あり毎年九月流鏑馬の神事あり此由縁これありといへども略して宮前より坂の間は八まん坂といふ

野分して縄ひかれし駒の走りけれ　盛志

袖むけし汁や畦ぬれぬ　雲檀　此江

されどこそ花はちりぬる蝶の羽　久武

檀所院　善臺院　圓珠院　玄陽院　儀本院　福乗院

般若院　今改号三学院 地蔵堂アリ　右三十余院の内なれど委くは略して

花蔵院　三十六丁ニアリ

羽黒山中大先達の一寺なり是寺の寺ハ皆天台の修験基已来我羽黒積らん寺院のうち霊宝数多有る故にありとしかりし当住侶清海師まで此院の規模ありて中興ともいふべき大建立ありしその外一山の勤労それ勲功他にすぐれたるよりして今に至る誰の是を称せざらん就中近歳遂建寺院ノ宮当南東方出丈

餘岩土ニ形如玉字ノ是鑁天ノ種字也御ちかひ権現本社
のうしろ鑁天堂の傍より冷水湧出して此梵字に当
り来る者奇異なりとて穿井その水を掬ぶに清
冷なること如甘露妙薬是豈天女の感応不甚深乎因
名福寿水又呼甘露泉此辺の絶景島海に向ふし
寂として浪ゆく帆もあり心に見る所は月山
乾のかたに鳥海の詩よむ人多し此村里なども
まれなるなり

笑帆行帆月見る人は遠きの船　無倫

浦なみや空をかけ船もまちたる　康東水

山眉は秋をゆくてもよりの　人識

景なかりし嶋風も木ににほひす　今鶴岡 水軒

酒淙し滝の海に床水はつの郷　紫片

宝徳院　南陽院　能林院

右三千余院のうちたる筋のなりしなり

能除太子御坐石　三十六丁ニアリ

往昔能除太子登嶺のおりふしの労に息ひ給ひ
し所御腰を掛られしまでのなごり給ふとなん旧記に能
林院と此地内にありしを此石の上にて宝瑞をつらね此石
に袖し往還の貴賤拝する事かくて威徳を
太子昇天の後にみな皆のこれる石なり止まり
きたりあるとかく名高く行ひ

苺花むすびしいねも青だつ人　水軒

立よ汝し尻こそぶらし昔の花　且松

千載の汗やうらまれ石の霜　立宇

十五童坂

滲の坂あり弁天堂の西に有まハかくるれば汗滲るゆゑや修行屋舗しむ法ちの露ちりしたるとぞ

下花表

辯天堂

是ハ古よりの堂なりして権現本社の堂番僧勤む弁天乃擁護の不思議経に説ける讃歎せるかくし此弁天の奇特しるしあらはれてよしし思ふべく

能除堂

太子の御事ハ異説紛々としてその中の正説をいはゞ舊記曰崇峻天皇（人皇三十二代）第三王子一名参拂理依形貌醜頗爲募荒相放北海濱然太子直歸佛門詣而師于聖徳太子（人皇三十一代用明天皇ノ第二子ナリ）以雜髮染衣焉法名弘海心性勇猛備有凌雲志且離京域棲遠濱往攀羽山修捨身行住阿久谷三秋衣以藤皮食以樹果平日無他韓特信般若經力誦能除一切苦之文又誦能所一切空之文故時俗呼曰能除仙と云〻かのしつり此時蘇我馬子謀弑天皇事見帝王略記等故太子出奔乎又曰人王三十代（二十九代）欽明帝御宇至崇峻帝王子参拂理依天皇之詔至羽州時片羽八尺靈鳥蜚來而導才登于羽峰拜生

身ヲ觀世音菩薩ト時ニ讃シテ曰ク善哉聖者修シテ勇猛ノ行ヲ一身ノ善業
普ク利ス于他ニ當ニ感見弥陀大日所居ノ土ニ則化シテ成リ靈鳥ト蜚ヒ揚ル月山
及湯殿山ニ且虚空ニ誥テ曰ク我ハ是羽黒神社也永ク欲ス使メント汝ヲシテ與ヘ吾山ニ
即授ク三面ノ宝火珠ヲ云々　右の此宝火珠ハ今に自燧と號す
不動明王自臂ヲ放燧を出し給ふ手に持之則清浄常火是なり
今此世に到るまでも湯殿行者ハ此常火を用ひられバ登
嶺難叶得常火堂の下より奥より綴りて月山湯殿登
巖これ奇瑞彼下り澤あれども故略ス夏ニ右子山中より遂
建てる所の此寺院若干なる所中より
羽黒山寂光寺　　堂塔山瀧水寺　　南滝山禅定寺
来光山千勝寺　　下居山中禅寺　　醫王山積乗寺

不動山嘉祥寺　　漆川山加我寺　　金色山福王寺
荒澤山廣澤寺　　此外数多有りといへどもおほければ
略す其の中にも二ぼう一尺七寸の彩像を刻て安置し
給ふ今に存之
太子在世ノ霊験廣大なる中にもあらにては太子山岸へ居の折
うら辺里ニ疫癘を悩む就中介川ノ縣主ニ疾甚して三年
腰脚癈り故に頻に太子此高徳を得て慕ひて山
崖より待を則太子を遣らんとする日彼縣主の屋宅より
火出て悉焼亡して病者もあわてふためき出て火焔を
逃れける所々より太子則ちまた其の屋宇を得て
痛むことなく病者も頓に愈へ腰脚おのづから堅康

なり是則能除一切苦の經力殺生の智也とあるべく病
患遠離り煩亡を除しなん因くいて貴賤是を崇
尊しその功いよ〳〵まし
上件の事ハ舊記乃趣意を取て独り筆を略識す
太子の事ハ遍く世の知る所なれバこゝに記さず彼
是ハ是東宗の祖よりて當山五十世の別當天宥師の
第覺樹院宥海と云水無瀬中納言殿の御息なれど
はた子の御事は禁中記録にも見えず
を清文通ありて水無瀬殿の有を清
それからひとし崇峻帝の皇子と書たりける
なりかなはいひ身の遠陸編む

出家斗擻のわざしるなりける或議曰往昔奥羽俗進蝦夷
勇押毳奴抗王師事所戴史傳可見吾能除獨開山嶽驅
猛獸而後蒼生得安遂使之領西天法味長為朝廷之藩
屏且奥羽俗識大權現為地能佐信之三州共浴其化者多し
焉奥羽諸侯東征都督皆先致幣帛於此山若怠則危云々
此能除堂より於く一世別行の上人ありて色を
金剛佛子阿闍梨弘俊尊法坊（人皇三十三代）推古帝の勅を
く執行の任より住を除より己来今の世乃上人是を此堂
黄戴く故實なりの羽山城
法印永忠か秘書あり
未来記羽の山 東水

花守や行者の山の花まもる　呂笳

ある記に上人号は事を覚樹院殿より水を染殿へ
奉りはるいされける也此宥海法印は承応元年（人皇百十代後光明院御宇）
の比天宥師師弟の法契約して同二年午の夏羽
山へ請下つてみづから峯中修行ありしかる應欽（ワウジ）といへる
者ありて峯より帰らせられける狂録をあらはす其ころ椋
みなく佛法僧といへる霊鳥（レイテウ）鳴（ナキ）けるをきゝなん此鳥はれけるすい
類（タグ）ひなれば霊鳥なるとて高野の通念集にも手傳くより
かの奇事筆にて其の席（ツイテ）よりおもしろく出たるかたりけり
これ従家山門修学経（ホド）通して此山へ又うつり住しける
とも天宥師と聊法中遠（タク）ひける事やまさに人皆見たる（百八代後水尾院御宇）

年ふりし二十六歳まして一去萬里は身をなくせしも
けるとぞ哀なるかな人倫の道遁世（トンセイ）傳へて古きありつる法
坊舎は一間より一首づゝおしまつ
ゆかれは花のかをる露よりもかろく仇（アダ）なる世をゆへ傳

神變堂

三山権現の法要は此堂にてあり毎歳六月十五日は法
祭礼の時呉成出そ

大柴燈（サイトウ）石壇

天下國家五穀豊登（フトウ）は祠（コツリ）として執行職先達職是役
修行せる事あり柴灯大柴灯の事吹越（フキコシ）の下小題（ホト）
志所を峯中の行事中しは秘事なれば略して執

行職家康公の時於開山堂ニ大饗あり

御影堂

當山別當執行四十八世宥源四十九世宥俊二代の法弟并ニ寂上出羽守源ノ義晃乃法位歸あり元和年（百八代後水尾院）中ニ宥俊造建